

平成 11 年 8 月 24 日

みんなで考えよう…エイズ、そして愛すること 『ティーン&AIDS in Summer』開催

本日 24 日、豊島区池袋保健所「AIDS 知ろう館」で、中高生を対象にエイズを共に考えるつどい『ティーン&AIDS in Summer』が開催された。

会場となった「AIDS 知ろう館」は、エイズに対する正しい理解・行動の啓発を目的に、平成 6 年 10 月、全国に先駆け旧池袋保健所に開設された施設で、昨年 12 月現在の池袋保健所開設にあわせ移転、より充実した情報センターとして、エイズ関連資料の収集・展示や啓発事業を行っている。

同施設は、感染者や彼らを支援するボランティア関係者の活動の場として利用されている他、これまでさまざまな見学者を区内外から迎えているが、中高生の来館も多い。もともと同館開設のきっかけのひとつとなったのが、当時はまだエイズに対する正しい理解が遅れており、エイズに対する不安が社会的なパニック現象となる中、エイズについて調べたいと中高生達が保健所を訪れてきたことによる。その後、HIV 訴訟やエイズをテーマにしたドラマの放映などを通じ、そうした若い世代のエイズへの関心は、次第に高まってきている。今回の『ティーン&AIDS in Summer』は、こうした状況を受けて、これまで主に一般成人を対象に行ってきたエイズイベントを、中高生を対象を絞り、夏休みのこの時期に開催することになったものである。

「中高生のみんな、AIDS を考えよう！」のテーマのもと、会場をフリートーク・ビデオ・キルト作りの三つのコーナーに仕切り、午前 10 時から午後 4 時までイベントは開催された。また中高生が気軽に来場できるよう、さまざまなパネルや資料、中学校や高校から寄贈されたメッセージキルトなども展示され、自由で楽しい雰囲気が作られた。

午後トークコーナーを訪れた高校 1 年生の二人組は、「エイズのことは知っているが、自分達のこととして身近に感じることはあまりない」「友達同志で、そうした話題をあまりしゃべらない」と語っていたが、保健所の医師のエイズに関する話に、熱心に耳を傾けていた。また、「人を好きになったり、つきあったりしていく上で、エイズは他人のことではすまされない」「エイズは生と死に関わる問題。感受性が豊かな世代だからこそ、死について、生きる意味について考えて欲しい」といった保健所スタッフの意見にも、それぞれ何かを感じた様子だった。

実際に身の回りで何か事件が起きないとエイズを身近に考えることはなかなか難しいが、こうしたイベントをきっかけに、エイズに対する関心が若い世代に少しずつ広がっていくことが期待される。

詳細：池袋保健所 健康推進課